

随筆 シャープ博士の思い出

金 子 宏

〔東京大学〕
〔名誉教授〕

カール・シャウプ博士の名前を始めて耳にしたのは、昭和 24 年（1949 年）の 5 月のことであった。ある日、なにげなくラジオのスイッチを入れると、丁度ニュースの時間で、池田勇人大蔵大臣が、わが国の税制改革につき勧告するために来日したコロンビア大学教授のカール・シャウプ博士（シャウプ使節団団長）を羽田で出迎えた、という放送をしていた。翌日の新聞にも同じ記事が出た（写真つきであったと記憶している）。このとき、私は、将来、シャウプ博士およびシャウプ勧告と密接な関係をもつことになるとは想像もできなかった。

その後、大学を卒業し、助手を経て、昭和 31 年（1956 年）に助教授になって、間もなく租税法の研究を始めたが、最初に読んだ文献は、ドイツの若干の概説書（ビューラー、ヘーンゼル等）と並んで、シャウプ勧告であった⁽¹⁾。同勧告はドイツの書物に比べてかなり難解であったが、発想と内容が理論的であると同時に実証的で、大変に興味ぶかく、苦勞しながらもなんとか読み進み、読み終ったときには、大きな感銘を受け、深い感動を覚えた。特に、公平の理念を基礎において一国の税制をデザインするという姿勢に強い魅力を感じた。

今になって思うと、私が主要な研究分野として所得税を選び、最初の研究テーマとして所得概念の問題をとり上げたのは、研究の始めにシャウプ勧告を読んだことが大きく影響していると思うし、また租税実体法＝課税要件法中心の租税法の体系を提唱し、実際にそのような体系の書物（租税法（初版・昭和 45 年、13 版・平成 20 年））を書いたのは、杉村章三郎先生の「公法上の債務関係」という発想、ヘーンゼルの課税要件（Steuertatbestand）という概念、およびシャウプ勧告の所得税中心主義という 3 つの要素が、アメリカ留学を契機として、私の頭の中で自然に結合した結果ではないかと思われる。

その意味で、シャウプ博士およびシャウプ勧告は、私にとって大恩人である。それに、なによりも、わが国における独立の法分野としての租税法の本格的研

(1) シャウプ勧告に関する文献については、金子宏『租税法 13 版』（平成 20 年・弘文堂）54 頁注(2)、同「シャウプ勧告の歴史的意義－21 世紀に向けて－」租税法研究 28 巻 2 頁注(1)参照。特に、博士の生い立ち、人となり等については、柴田弘文・柴田愛子『シャウプの証言－シャウプ税制使節団の教訓－』（昭和 63 年、税務経理協会）参照。

究と教育は、シャウプ勧告の、大学の法学部は所得税や法人税を中心とした租税法の教育を行うべきであるという趣旨の提言をきっかけとして始ったわけであるから、シャウプ博士およびシャウプ勧告は、わが国の租税法学会にとっても大恩人である。

そういうわけで、私は、是非ともシャウプ博士にお会いして、シャウプ勧告のことをいろいろと伺い、また租税の理論や制度についていろいろと教えを乞いたいと考えていたが、さいわいなことに何度もお会いして親しくお話を伺い、また教えをいただくことができた。シャウプ博士と親交のあった日本人は少なくなく、私より親しかった人も何人もおられるが、何分にもシャウプ勧告以来 60 年近い年月が経過し、今では親交のあった方々の多くが逝去されているので、残された者の 1 人として、研究者としての立場からここで個人的な想い出を綴っておきたい。

私が最初にシャウプ博士にお会いしたのは、昭和 45 年（1970 年）に大蔵省の税制研究調査団の一員としてニューヨークを訪問したときである。大蔵省ニューヨーク事務所の事前のアレンジメントに基づき、コロンビア大学の研究室に博士を訪れたところ、博士は、シャウプ使節団の一員であった同大学ロースクールのディーンであるウィリアム・ウォーレン教授にも声をかけて下さっており、さいわいなことに、われわれは使節団の 2 人のメンバーに同時に会うことができたのである。シャウプ博士は、すぐれた学者であると同時に温かい人柄の持主であるというのが、私の第一印象であった。気取ったところがなく、親切にわれわれを遇し、話しをして下さった。私は、初対面のこととてひどく緊張していたが、おかげで少しずつ緊張がゆるんでゆくのを覚えた。

2 度目は、昭和 47 年（1972 年）の秋にサリー教授とともに来日されたときである。高木文雄主税局長の、両先生にシャウプ勧告以降のわが国の税制の動向を見ていただきたいという考えに基づいて、大蔵省が招待したのである。両先生とも会議、講演、視察等で大変に多忙の中を設立早々の租税法学会の研究集会にもお見え下さり、サリー教授のアメリカの税制改正に関する講演のあと、おそろいで会員からのシャウプ勧告を始めとする諸々の質問に答え、また意見

を述べて下さった。終ったあと、会場であった東京大学中央図書館の玄関前の石段に多数の人々が何列にも並んで手を振りながら両先生を見送ったときの光景は、今も忘れることができない。

私は、昭和 51 年（1976 年）の春から 1 年間、ハーバード・ロー・スクールで 2 度目の在外研究を行った。そのとき、シャウプ御夫妻がニューハンプシャーのお宅から出かけてきて、サリー教授のお宅に滞在されたことがあり、サリー教授は、われわれ夫婦を含む数名の日本人をお宅のティーパーティーに招いて下さった。とてもアットホームな楽しいパーティーで、シャウプ御夫妻、サリー御夫妻とともに私ども夫婦が横一列に並んで撮った写真は、私にとっては大切な宝物である。

そのときに、シャウプ御夫妻から、家族で泊りがけでニューハンプシャーの家に遊びにこないかというお誘いをいただいた。皆で泊りがけでというのは、アメリカでは親しい間柄では普通のことのようであるが、御迷惑をかけてはいけなと考えて、しばらくしてから電話で、朝早くケンブリッジを出発して昼すこし前に着き、昼食を御馳走になってその日の午後に失礼するというにしていた。

当日は、紅葉が始まる前のすばらしい快晴の日であったが、朝早く出発して、あらかじめ教えていただいていた道を辿って昼近くにシャウプ博士のお宅に到着した。ニューハンプシャーの中央部にあるウィナパサーキーという大きな湖の北側の森林地帯の中にセンターサンドイッチという小さな町があるが、シャウプ博士はコロンビア大学在職中から、その郊外の森林の中にある家で夏をすごすことにしており、退職後はそこに居を定められたのであった。おいしい昼食を御馳走になったあと、家内と 2 人の娘は奥さまに町を案内していただくことになり、私は書斎で話を伺うことになった。書斎は家の裏側の深い森の中の小径を巡って行ったところにあり、古い木材で外壁を張った落ち着いたたたずまいの建物で、内部は沢山の書物を壁面の書架に収めた使い勝手のよさそうな快適な空間であった。教授は、毎日、何時間かそこで静かに研究し、思索にふけり、執筆をしておられるようであった。そこでは、学問のことのみになく、政

治、外交、経済等、いろいろの問題について御意見を伺い、私の意見を申し上げたが、学問のことについては、私の行っている所得概念の研究についてお話し、博士からいろいろと有益な教えを受けた。また、博士は、有名なセリグマン教授の高弟であるが、セリグマンは外国政府から税制に関する勧告や助言のために招待されることがしばしばあり、博士はそれに同行することが多く、シャウプ勧告のときもその経験が役立ったと述べておられた。あの森の小径の奥の書斎の風景は、今でも私の脳裏に鮮かによみがえってくる。

御婦人達かもどってきた（奥さまから無線で連絡が入った。博士御夫妻はセンスが若々しく、離れたところにいるときはお互いに無線で連絡し合っていたのである）ので、母屋にもどり、居間でくつろぎながらハイティーをいただいたあと辞去したが、家族にとっても、私にとっても、非常に楽しい忘れがたい1日であった。

帰国後は文通とカードの交換が続いたが、長い間お会いすることはできなかった。そのうち、1980年代半ばから、本格的な税制改革の動きが始まり、関係者の間で誰からともなく、改革の結果をシャウプ博士に見ていただきたいということになった。国際交流基金にお願いして招待していただくことにした。何分にも御高齢であるので早い方がよいが、しかし改革の全体像について見ていただくためには、改正法が成立した後が好ましいということになり、当時は中曽根内閣の下で直接税の改革が昭和62年（1987年）にほぼ終り、次いで昭和63年（1988年）の前半までには売上税法案が国会を通過すると予想されていたため、昭和63年の秋に来ていただくことになった。ところが、予想とことなり、売上税法案が廃案となり、竹下内閣の下で新たに消費税法案が国会に提出され、博士の来日は丁度、消費税法案の国会審議が大詰めを迎えていた時期と重なり心配したが、博士は主税局の担当官の作成した直接税の改正および消費税法案の英文資料を読みつつ専門家として改革の内容について研究を行った。ただし、日本の税制改革のあり方や内容について意見を述べることは控えられた。

この期間中には、竹下総理を表敬訪問されたが、総理は日本の税制の大恩人である博士に敬意を表すると同時に、昭和24年の6月にシャウプ使節団が西と

東の二手に分かれて実態調査を行い、シャウプ博士が西側の団長として松江を訪問されたときに、県会議員として一行を松江駅で出迎えたという話などが出たといわれる。また、シャウプ勧告当時の大蔵省の在職者で親交のあった人々と懇親の機会をもち、旧交を温められた。思い出話しとともに、国際経済、国際金融の動向なども話題になったとのことである。

奥さまが体調をくずしておられて一緒に来られなかったのは残念であるが、令嬢のマイヤー夫人が付添ってこられた。おつかれになったと思うが、元気で日程をこなされ、帰国された。なお、消費税法案は、その年の12月24日に国会を通過し、平成元年4月1日から施行された。

平成2年(1990年)に、オールドマン教授から、シャウプ博士が蔵書と資料の大部分をあずけている倉庫がとりこわされることになり、その処分を検討中である、アメリカのいくつかの大学から受け入れたいという希望が寄せられているが、日本で受け入れてくれるところはないかという問い合わせがあった。シャウプ博士もそれを希望しておられるとのことであるので、私としては、博士のわが国の税制改革に対する大きな貢献にたづね、是非ともわが国で受入れるべきだと考え、できるだけのお手伝いをさせていただくことにした。しかるべき大学または研究機関に受け入れてもらうのがよいと考えて、いろいろと考慮の末、横浜国立大学にお願いしたところ、快く引き受けて下さった。蔵書と資料は、平成3年(1991年)1月に横浜国立大学に2回に分けて搬入されたが、大型ダンボールで465箱という大量であった。横浜国大ではこれらの蔵書、資料を、(1)書籍、(2)雑誌、(3)文書の3種類に分けて整理することとし、(1)と(2)の整理は、同年12月にほぼ完了した。(3)の文書の整理については、その分量が膨大であり、未整理、未ファイルのものが多いため、大変な時間とエネルギーを要し、また、非常に困難を伴うことが予想されたため、松元宏経済学部教授を委員長とする「シャウプ資料整理委員会」が設けられ、佐々木哲也 麻布大学講師に専任担当者になっていただき、10年位を見込んで作業が開始された。平成12年(2000年)3月までに整理がほぼ終了し、分類・目録も仕上がり、同年8月に、(1)(2)(3)の全体が『カール・シャウプコレクション』

の名称で同大学附属図書館に一括配架された⁽²⁾。(3)の文書類の中には、シャウプ勸告関連の貴重な資料が多数含まれている。シャウプ博士は、奇しくも同年3月に逝去されたが、博士と日本との深いつながりにかんがみ、またシャウプ博士の功績に感謝する意味でも、博士の蔵書・資料を一括して日本に受入れたのは正しい選択であり、非常に有意義なことであったと考える。この機会を借りて横浜国立大学および受入れ、整理についてお世話下さった関係者各位に厚くお礼を申し上げ、また敬意を表したい。また、このコレクションが多くの人々によって広く有効に利用されることを希望して止まない。

私は、東京大学を平成3年(1991年)に退職したが、その翌年の平成4年の4月から約半年間、ハーバード・ロー・スクールで3回目の在外研究の機会をもった。オールドマン教授と相談してシャウプ博士を訪問することになった。シャウプ御夫妻は、年をとられたため、森の中の家から町の中のシニア用のバリアフリーの家に移っておられた。裏側が庭をへだてて林に面した静かな環境の家で、すべての点で高齢者にやさしい便利そうな家であった。近くに同じ規格の家が数軒あるが、シャウプ博士の家は書斎の分だけ広いとのことであった。博士は蔵書と資料を一括して日本に引取ってもらったことを大変に喜び、感謝しておられた。裏側のベランダでお茶をいただいた後、すこし離れたレストランで昼食を御馳走して下さるとのことで、博士の運転する車にのせてもらって、レストランに行き、ニューイングランド風の昼食を御馳走になった。そのあとお宅にもどり、しばらくお話をしてから、オールドマン夫人の運転でケンブリッジにもどった。とても充実した1日であったが、シャウプ夫人が元気がなさそうなのが気になった。

帰国してからも、ときどき文通をし、カードの交換が続いた。奥さまの健康のことが心配であったが、奥さまは1990年代の後半に逝去され、博士御自身も2000年の3月に逝去された。奥さまの場合も博士の場合も近くに住んでおられ

(2) このコレクションについては、松元宏・佐々木哲也「カール・シャウプコレクションの内容と史料的意义ーシャウプ使節団成立と活動の経緯を中心にー」横浜国立大学経済学会エコノミア 54 巻 2 号 (2003 年 11 月) 73 頁以下参照。

た令嬢のマイヤー夫人が献身的なお世話をされたとのことである。

シャウプ博士の追悼ミサは、平成 12 年（2000 年）の 5 月にセンターサントイッチのパプティスト教会で行われた。遺族、親類、友人、知人、教え子等、多数の人々が参列した。私もオールドマン教授御夫妻とともに参列した。日本人の参列者は直弟子の柴田弘文教授御夫妻を含めて 10 名程であった。日本政府を代表して、宮澤喜一大蔵大臣の弔辞が代読された。シャウプ博士の日本の税制改革への大きな貢献に感謝し、博士を追慕する内容の格調の高いものであった。

令息が、遺族を代表して父親としてのカール・シャウプについて語り、リチャード・バード教授と柴田弘文教授が、弟子を代表して恩師カール・シャウプ教授の思い出を語った。また、隣人は博士の日常生活や博士とのおつき合いについて語ったが、博士は近くの人達とシェイクスピアを読む会を作り、月に何回か集って各メンバーがあらかじめ引き受けていた登場人物になって作品を朗読することを楽しみにしておられた由であった。博士のお人柄の故であると思うが、ミサは終始、しみじみとした中にも温かい、明るい雰囲気のものであった。ミサの終了後、教会附属のホールでシャウプ家主催の茶会が開かれた。会場には、博士の著書、論文、遺品等が並べられていたが、その中には昭和天皇から授与された勲一等の勲章もあり、参会者の注目を集めていた。

シャウプ博士が逝去されてから 8 年の歳月が経過した。シャウプ博士がすぐれた経済学者、財政学者であったことはいうまでもないが、同時に博士がすぐれた人格の持ち主であり、人間としてきわめて魅力的であったことは、よく知られているところである。バード教授および柴田教授も、上述の追悼の言葉の中で、博士は学問について峻厳であったが、同時に温かい、思いやりの気持の強い人で、困っている弟子達に対してはいつも救いの手を差し伸べたということを書いていた。

シャウプ博士の最大の遺産は、シャウプ勸告であるといってよいと思うが、なぜ短期間のうちにあのように水準の高い報告書を完成することができたのであろうか。当時の日本が占領下にあり、シャウプ使節団がマッカーサー占領軍最高司令官の招きで来日したという事実は、もちろん非常に重要なファクター

であるが、それだけでは説明がつかない。重要なファクターの1つは、シャウプ博士およびその他の使節団のメンバーの何人かが租税理論に精通しており（20世紀前半の租税理論の多くの部分は、彼等が作ったものである）、また何人かのメンバーが経済分析に通暁していたことであろう。

しかし、それに劣らず重要なファクターは、来日してから短期間のうちに大蔵省および地方自治庁の高官達との間に意思疎通と相互理解を図ることができ、それを通じて日本側と円滑な関係を作ることができたことにあったのではなかろうか。大蔵省の高官達は、博士の学者としての能力を高く評価し（記録を見ると、博士の日本側に対する質問がきわめて的を射たものであることが分る）、また博士の率直で魅力的な人柄に好感をもった（その人柄からして、博士は率直に意見を述べたが、押しつけがましいところや高圧的なところはなかったと思われる）模様である。そのことは、シャウプ使節団と関係のあった日本側の人々が、その後も博士に敬意と好意をもち続けていることから明らかである。その他の重要なファクターとしては、都留重人教授、汐見三郎教授のようなすぐれた協力者を得ることができたこと、等をあげることができる。

いずれにしても、あのように質の高い報告書は、「学者としての、そして人間としての」カール・シャウプなしにはあり得なかったと言ってよいであろう。

シャウプ勧告は、約60年を経た現在も輝きを失っていない。わが国の税制改革に当って、シャウプ勧告は改革の規範ないし基準のように引照されるのが今でも通例である。また、現在問題になっている相続税の取得者課税への純化や地方税源の充実は、まさにシャウプ勧告への回帰であり、あるいは同勧告の実施されていなかった部分のおくればせながらの実現である。その意味で、シャウプ勧告は、今後もわが国の税制に永く直接・間接の影響を及ぼしてゆくであろうし、またシャウプ博士のことも永く語りつがれてゆくであろう。なお、最後に、横浜国立大学のカール・シャウプコレクションがシャウプ勧告研究のセンターとして、多くの人々に利用され、さらには租税政策研究のセンターとしても発展してゆくことを希望して、筆を擱く。